

源氏物語と聖徳太子伝暦

杉浦 一雄

目次

- 一 はじめに
- 二 源氏物語の構想と伝暦
- 三 物語論と伝暦
- 四 異郷の祖

一 はじめに

これまでに私は、『源氏物語』の主人公光源氏の人物像がスサノヲノミコトを基本としながらも、聖徳太子の精神を模範として造型されたことを述べてきた(1)。すなわち、俗世に身を置き、現実の世界に「異郷」を現出しようと求めた点において、光源氏がスサノヲノミコトには見られない現世尊重の精神を聖徳太子から受け継いだ人物であることを指摘したのである。その意味で聖徳太子は、光源氏の数あるモデルの一人というだけでなく、スサノヲノミコトに匹敵する重要な存在だったと結論したのであった。

ところで、こうした紫式部の聖徳太子観の形成には、『日本書紀』はさることながら、『聖徳太子伝暦』の寄与するところが大きかったのではなからうか。

当時最もよく知られていた太子伝こそ、『聖徳太子伝暦』であった。式部は、『聖徳太子伝暦』から多くのものを獲得していったと思われる。しかも、それは太子に関する事績ばかりではなく、『源氏物語』を執筆する上での規範となるものではなかつたろうか。すなわち式部は、『聖徳太子伝暦』から物語創作の根幹に関わる重要な要素を学び取ったと言えるのではなからうか。

そこでここでは、『聖徳太子伝暦』という書物を取り上げることによって、『聖徳太子伝暦』が『源氏物語』の成立に果たした根本的な意義を明らかにしてみたいと思う。

二 源氏物語の構想と伝暦

『聖徳太子伝暦』は、平安時代に成立した代表的な聖徳太子の伝記である。漢文体で書かれた上下二巻からなる書物で、著者未詳。『平氏太子伝』『平氏伝』『二巻伝』なども別称され、略して『伝暦』とも呼ばれている。それ以前に成立した『上宮記』『上宮聖徳法王帝説』『七代記』『上宮皇太子菩薩伝』『上宮聖徳太子伝補闕記』『暦録』などの太子伝を集大成し、そこに伝説や虚構を大幅に加味することによって文学性豊かに仕上げられた伝記物語で、太子伝文学の決定版とされている。後世に最も大きな影響を与えた作品の一つで、源為憲の『三宝絵詞』や慶滋保胤の『日本往生極楽記』に記されている太子の伝記は、皆この『伝暦』に拠っているとされる。人びとの太子観はこの書によって形成されたとき

れ、以後の太子信仰はこの書から発したときえ言われている。坂本太郎氏は、『聖徳太子伝暦』について、次のように述べておられる。

太子の伝記を仏教的雰囲気で被いつくし、太子を信仰の対象に仕上げたのは本書である。以後の太子伝は本書を台本として敷衍せられ、太子像・太子絵伝なども本書の筋に従って製作せられた。仏教界における太子の特異の位置を一般世間に浸透させたのは、全く本書の力である(2)。

すなわち『聖徳太子伝暦』は、太子伝文学において、また太子信仰において決定的な影響力を及ぼした著作だったと言うことができるのである。

『源氏物語』はそうした『聖徳太子伝暦』から計り知れない影響を受けているのではなからうか。

『聖徳太子伝暦』が『源氏物語』の成立に大きな影を落としていることをいち早く指摘されたのは、田中重久氏であった(3)。氏は、『源氏物語』構想と準拠の研究」という論文において、『源氏物語』の構想が『聖徳太子伝暦』を踏襲し、『源氏物語』の場面や設定が『聖徳太子伝暦』を準拠として書かれていることを指摘されたのである。

ここでは、氏のご指摘に敬意を表しながらも、とりわけ構想の面から両者の関連を考察してみたいと思う。

以下、『源氏物語』と『聖徳太子伝暦』との構想上における主な共通点を挙げてみよう。

まず第一の共通点は、いずれも傑出した人物に関する詳細な一代記であるという点である。

『源氏物語』は、光源氏という超人的な人物の生涯を丹念に記した物語で、その誕生から死までを網羅する一代記だということができる。『源氏物語』以前で一代記と言うと、たとえば在原業平の生涯を描いた『伊勢物語』を想起することができようが、これには誕生などの記述がなく、記述自体も詳細さに欠けるため、一代記という面から見れば不十分な作品と言わざるを得ない。そこで、主人公の生涯を全面的に網羅し、しかもそれらを詳細に記した『源氏物語』は、物語として最も古い一代記だと言うことができるのである。これに対して、『聖徳太子伝暦』は、聖人と呼ぶべき聖徳太子の生涯をつぶさに記した物語で、その誕生から死までを網羅する、これまた一代記だと言いうことができる。『伝暦』はそれまでの数ある太子伝を集大成したもので、記事の内容が詳細に亘り、完結した太子の伝記としては最古のものとされている。いわば太子に関する伝記物語の傑作なのである。

『聖徳太子伝暦』は、古代から中世にかけての聖徳太子信仰の過程にあつて成立した太子伝の一つであつて、いわば古代中期における太子伝文学の集大成である。『聖徳太子伝暦』以前にも、成書としての太子伝は幾篇かを数えることができるし、正史たる『日本書紀』(推古紀)中にもその伝は見えている。しかし、聖徳太子の誕生からその全生涯の行歴・治績を描き、薨後の一族の命運に至るまでを、年譜風に編年体で詳述している書は、『聖徳太子伝暦』をもって最初の撰述とする(4)。

すなわち、実在の人物の生涯を漢文で記した『聖徳太子伝暦』に対して、架空の人物の生涯を和文で記した『源氏物語』

は、漢文と和文という点でまさに対蹠的ではあるものの、いずれも特筆すべき人物の詳細な一代記という点において共通していると言えるのである。

第二の共通点は、その記述の方法がいずれも、出来事を年代順に記す編年体を基本としているという点である。

『源氏物語』は、光源氏誕生以前の、父帝と母である桐壺の更衣の結婚生活のことから書き起こされ、少年時代、青年時代、壮年そして五十代で亡くなるまでのことが年を追って連綿と記されている。勿論、記述のなかには内容が時間的に遡るものもないわけではないが、編年体を記述の基本としていることに変わりはない。これに対して、『聖徳太子伝暦』もまた編年体で記されているのである。『伝暦』の「暦」は、年代記ないしは年譜、年暦の意で、『聖徳太子伝暦』という書名は、聖徳太子の伝記を年代記として年譜風にまとめたものを意味しているという⁽⁵⁾。『伝暦』は、太子誕生以前、太子の父である後の用明天皇と太子の母となる穴穂部間人皇女との成婚から筆が起こされ、少年時代、青年時代、壮年そして太子が四十九歳で亡くなるまでのことを順を追って詳細に記載し、その記述は一年として欠けることのない徹底ぶりである。すなわち、『源氏物語』と『聖徳太子伝暦』は、編年体で記すというその記述の方法においても軌を一にしていると言えるのである。

そしてさらに、両者の記述形式は、主人公の死後にまで及んでいる点でも見事に一致している。

『源氏物語』は、光源氏の生涯を出生から死に至るまでをつぶさにもの語ったあとで、源氏の息子にあたる薫をはじめとする子孫のことを記述する。つまり、『源氏物語』は光源氏の一代記とは言っても、その死によって物語が閉じられず、

死後における子孫のことに筆が及んでいるのである。実は、これとまったく同じ形式は『聖徳太子伝暦』にもそのまま見ることが出来る。『伝暦』においても、聖徳太子の出生から死に至るまでを語り終えたのちに、太子の息子である山背大兄王をはじめとする子孫のことがつづけて語られているのである。因みに『伊勢物語』では、最終段において主人公在原業平の辞世とともに物語は幕を下ろし、それが一代記の本来の形式とも考えられるが、『源氏物語』は所謂「宇治十帖」を含む死後の物語を語り継いでいるのである。ということは、『源氏物語』が光源氏の死後、延々と子孫のことに話が及ぶのは、その根底に『聖徳太子伝暦』の記述形式を踏まえたためとみてよいのではなからうか。

この点について、田中重久氏は夙に、

全五十四帖は最初からの計画で、正編「光源氏伝」は『伝暦』の正編「聖徳太子伝」に、続編「薫伝」は『伝暦』の続編「山背大兄王伝」に倣って書かれた……⁽⁶⁾

と述べておられる。

すなわち『源氏物語』が、光源氏他界ののちの第三部に置いて残された一族について語るのとは、実は『伝暦』にその淵源があったと見ることが出来るのである。

しかも私が見たところ、この両者には、その記述の対象となつている年数においても驚くべき一致が認められるのである。

『源氏物語』は、光源氏誕生直前から五十二歳までを記したあと、源氏の死を暗示する空白の八年間が置かれ、そのうち子孫たちによる十五年間のことが記されて、全巻が閉じられている。物語時間にしてちょうど七十五年間である。これ

に対して『聖徳太子伝暦』は、太子の父であるのちの用明天皇のもとに母である穴穂部間人皇女が入内された欽明三十一年（五七〇）から書き起こされ、推古二十九年（六二二）、太子が四十九歳で薨去されるまでのことを記したあと、太子一族を葬り去った蘇我入鹿が討たれ、蘇我氏が滅亡する大化元年（六四五）をもって全巻を擲筆している。これもまた、数えてみるとちょうど七十五年間であり、『源氏物語』と完全に一致していることがわかる。ということは、『源氏物語』は記述の形式が編年体であるというだけではなく、所謂正編と続編とを併せもつという全体の構成や記述の対象となっている年数に至るまで『伝暦』をそっくり襲い、あたかも『伝暦』と符節を合わせるかのように書き上げられていたということになるのではなからうか。

第三の共通点は、いずれも数多くの文献を踏まえながらも、その根底に『日本書紀』が置かれていたという点である。

『源氏物語』は、これまでの文学作品を集大成した作品であり、先行の物語や和歌、日記、随筆などの諸作品をはじめ、『文選』『史記』『白氏文集』など和漢の文献を踏まえていることを大きな特徴としている。その文献は数もさることながら種類もまた多岐に亘り、式部の学殖の深さには驚かされるばかりである。しかし、『源氏物語』は、ただ単にさまざまな文献を寄せ集めたものではなく、その根底には、私が明らかにしたように『日本書紀』の神話が源泉として踏まえられているのである（7）。すなわち『源氏物語』は、さまざまな文献によって豊富に肉づけされながらも、その根幹部分には『日本書紀』が据えられていたのである。

これに対して『伝暦』もまた、『源氏物語』と同様に、夥しい数の先行文献が引用され、あるいは踏まえられている作

品なのである。具体的に書名を明示している文献としては『暦録』『七代記』『本願縁起』『大唐伝戒師僧名記伝』などが挙げられるが、これら以外にも、断片的な語句や文の引用に至っては膨大な数の内典外典に及んでおり、研究者からは「撰者の学力の一通りでないものを感じさせるものがある（8）」と評されているほどなのである。しかし、この『伝暦』にしてもこれまでの文献の単なる寄せ集めではなく、最も基本的な文献として『日本書紀』を踏まえ、それを骨格とした上に先行の太子伝やさまざまな文献を含み込んで、豊かな文学作品を創造することに成功しているのである。

伝暦といえは太子伝説の淵藪として、歴史家の間では評判が悪い。しかし、この書は年紀の立て方などは忠実に日本書紀に拠ったもので、書紀を中心としての伝説集成と言ふべきものである。奈良時代からの通念であった、太子伝の基幹としての日本書紀の位置が、この書でさらに確認されていると言つてよい（9）。

つまり『聖徳太子伝暦』と『源氏物語』は、作者の人並み外れた学殖を背景に、夥しい数の文献を縦横に駆使して創作された物語ではありながら、いずれもその根底に最も基本的な文献として『日本書紀』が踏まえられ、『日本書紀』を原典としていることによって共通していたのである。このことは、『伝暦』と『源氏物語』との共通点としても、とりわけ重要な事柄だと言えよう。

このように、『聖徳太子伝暦』と『源氏物語』には、細かな記述内容の類似といったことだけでなく、作品を成立させるにあたっての大きな枠組み、すなわち作品全体の構想に

おいても極めて重要な一致点が見出せるのである。これによって『聖徳太子伝暦』は、『源氏物語』が世に生み出されるにあたって極めて大きな役割を果たした著作だったと言いうことができるであろう。すなわち『源氏物語』は『聖徳太子伝暦』を換骨奪胎することによって生れた、いわば『光源氏伝暦』とも呼ぶべき作品だったのである。

紫式部の生きた時代、『聖徳太子伝暦』は太子信仰の異様な高まりのなかで、多くの人びとに聖典の如く愛読されていた。『伝暦』は、当時最もよく知られた作品の一つとして多大な影響を人びとに与えていたのである。式部もおそらくこの書を愛読したことであろう。そして彼女は、この『伝暦』を取り上げ、この書を模範としながら『源氏物語』の執筆に手を染めていったのではなかったか。そこには、『聖徳太子伝暦』という優れた物語に寄せる式部の並々ならぬ崇敬の念があった筈である。しかし、それ以上に、式部にとってこの書は、さらに意義深いものであったかも知れない。それというのも、この『聖徳太子伝暦』の作者が、ほかならぬ紫式部の曾祖父にあたる藤原兼輔の作ではないかと言われているからである。

藤原猶雪氏の『復原聖徳太子伝暦』に依れば、氏は、大正十年（一九二一）三月、東京大学附属図書館において『太子伝暦注』なる写本を発見、その写本に引用されていた菅原為長本『伝暦』こそ『伝暦』の原型本であるとされ、その奥書に記されていた「延喜十七年九月藏人頭兼輔撰」を根拠にして、『伝暦』の作者を藤原兼輔、そしてその成立を延喜十七年（九一七）と結論されたのであった⁽¹⁹⁾。以後、この説は学界の大勢から支持を受け、ほぼ定説として広く一般に行われることとなったのである。

藤原兼輔は、閑院左大臣冬嗣の曾孫にあたる平安中期の貴族である。元慶元年（八七七）に生まれ、藏人、左近少将、藏人頭、参議などを歴任、最終的には従三位、中納言兼右衛門督に至り、承平三年（九三三）二月十八日に五十七歳で没した。従兄弟である三条右大臣藤原定方の女を妻とし、娘桑子は醍醐天皇の更衣に上がり、天皇の寵を得て章明親王を生んでいる。歌人としても知られ、三十六歌仙の一人に数えられている。『古今集』に四首、『後撰集』に二十四首、以下の勅撰集に二十九首入集、家集に『兼輔集』がある。紀貫之・凡河内躬恒らの庇護者となって歌壇を形成、その才知と人柄は紀貫之をはじめ多くの人びとに慕われた。その邸宅が都の東京極に位置していたため「京極中納言」、あるいは賀茂川の堤にほど近かったところから「堤中納言」とも称された⁽²¹⁾。

紫式部はこの曾祖父を殊のほか敬愛していたようである。『源氏物語』には、兼輔の代表歌である「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（『後撰集』）を引歌として三回も用いているほどなのである。そればかりか、実は『源氏物語』に語られる時代は、兼輔が活躍した時代に設定されているのである。

『源氏物語』は、十世紀の前半、醍醐・村上天皇の時代を想定して書かれているというのが通説であるが、この時代は、のちに「延喜・天曆の治」と仰がれた「聖代」で、天皇親政の輝かしい時期であった。しかもこの時代は、文化の面においても注目され、和歌が新たな息吹をもって復活し、『古今集』『後撰集』が相次いで編纂され、『竹取物語』『土左日記』など物語文学・日記文学の原型が出現するなど、紀貫之を中心に所謂平安文学が創始された活気あふれる時代でもあった。

その時代にあつて兼輔は、歌才で知られる一方で、『聖徳太子伝暦』という漢文体の伝記物語の原型を創始したのであつた。

こうした時代を、強烈に意識していたのが紫式部である。式部は、紀貫之や藤原兼輔に熱い敬意のまなざしを向けていたはずである。とりわけ、和文で物語を執筆しようとしていた式部にとって、漢文とはいへ曾祖父が残した伝記物語は決定的な存在として揺るぎない価値をもっていたのではなかつたろうか。

無論、そうはいうものの、『聖徳太子伝暦』の作者を兼輔とする藤原氏の説に対しては、近年に至り阿部隆一、飯田瑞穂、坂本太郎各氏らから次々と批判的な意見が投げかけられ⁽¹²⁾、現在では疑問視する向きが多いのも事実である。

仮に『聖徳太子伝暦』の作者が兼輔ではないとしたところで、当面の私の主張に些かの支障も来たしはしないが、私としては、兼輔に対する敬愛、そして『伝暦』に対する紫式部の並々ならぬ思い入れから鑑みて、『伝暦』の作者を藤原兼輔とする学説はまことに魅力的だと思われるのである。

以上、『聖徳太子伝暦』と『源氏物語』との構想上の共通点として、いずれも傑出した人物の詳細な一代記であること、記述の方法が年次を追った編年体であること、主人公の死後も子孫のことにまで記述が及んでいること、記述の対象となっている年数が一致していること、多くの文献を踏まえながらも『日本書紀』を原典としていることなどを述べてきた。

これによれば、『聖徳太子伝暦』は『源氏物語』が作品として成立するにあたって、かけがえのない存在だったことが理解できるはずである。

三 物語論と伝暦

ところで、『聖徳太子伝暦』が『源氏物語』に与えた影響は、これまでに述べてきたように物語の全体に関わる大きな枠組みや構成といった外的な面だけに止まらず、実は物語の内部にまで及んでいるように私には思われる。すなわち、物語とは何かといった物語の核となる概念、物語観にまで『聖徳太子伝暦』の影響を認めることが出来るのではないか。

そこで、ここでは『源氏物語』のなかで展開される著名な「物語論」を取り上げ、『聖徳太子伝暦』とこの「物語論」とを比較することによって、『聖徳太子伝暦』の『源氏物語』に及ぼした影響が如何に深く、本質的なものであつたかを明らかにしてみたいと思う。

『源氏物語』の「物語論」は、第一部「蛍」の巻において展開されている。五月雨の頃、晴れやらぬ所在なきに、明けでも暮れても物語を読んだり書き写したりしている玉鬘のもとに光源氏が訪れ、玉鬘を相手に物語談義に興ずる場面である。全体は物語の主人公である光源氏の口を通して語られてはいるものの、『源氏物語』という物語のなかで展開される「物語論」であるだけに、物語に寄せる紫式部の真率な肉声を感じずにはいられない部分だと言えよう。

私は、この「物語論」に『聖徳太子伝暦』の物語としての姿勢が色濃く反映していると考えるのである。

以下、そのことを『聖徳太子伝暦』の「跋文」によって説明してみたいと思う。

『聖徳太子伝暦』の「跋文」には次のように記されている。

聖徳太子、入胎之始、在世之行、薨後之事、日本書記、在二天王寺壁^一。聖徳太子伝、并無名氏撰伝補闕記等、其載^二大概^一、不^レ尽^三委曲^一。而今遇^レ難波百濟寺老僧^一、出^二古老録伝太子行事^一、奇蹤之書^三二卷^一。与^二四卷曆録^一、比^二校年曆^一、一不^レ誤。余情大悦、載^二此一曆^一。恐以^二言不^レ經、覽者致^レ哂。庶幾不^レ遺^三小説^一、貽^二彼聖跡^一。豈以^二輒潤^三色妙徳^一乎。

賛曰、

微哉仏法

杏矣玄風

過去無^レ始

当来無^レ終

託^レ生鍊^レ骨

現^レ死還^レ躬

歴^二涉沙界^一

微猷^レ巨窮

我伊太子

降^二跡王宮^一

垂^二化後世^一

知^レ之有^レ通

奇蹤妙轍

遺習^二緇衆^一

拾集成^レ卷

庶伝^二幼童^一

聖徳太子、入胎の初め、在世の行、薨じたまひて後の事、日本書記、四天王寺の壁に在り。聖徳太子の伝、并せて無名氏の撰し伝へたる補闕記等は、其れ大概を載せて、委曲を尽くさず。而るに今、難波の百濟寺の老僧に遇うに、古老の録し伝へたる太子の行事、奇蹤の書三卷を出せり。四卷の曆録と、年曆を比較するに、一つも誤らず。余が情大に悦て、此の一曆に載す。恐らくは言の経らざるを以て、覽ん者哂を致さんことを。庶幾はくは、小説を遺てず、彼の聖跡を貽さん。豈に以て輒く妙徳を潤色するのみならん乎。

微なる哉仏法、杏なる矣玄風。

過去、始め無く、当来、終り無し。

生を託し骨を鍊ず、死を現じ躬を還す。

沙界を歴涉つて、微猷窮め巨し。

我が伊の太子、跡を王宮に降り、

化を後世に垂れ、知ぬ之れ通有りといふことを。

奇蹤妙轍にして、遺して緇衆に習はしめんとして、

拾ひ集めて巻と成せり。庶はくは幼童に伝へん(13)。

この「跋文」を読むと、『聖徳太子伝曆』の作者が『伝曆』を執筆するに至った動機やその経緯を詳細に知ることができ

る。これによると『伝曆』は、執筆の動機について「奇蹤妙轍にして、遺して緇衆に習はしめんとして、拾ひ集めて巻と成せり」と記している。つまり、聖徳太子の事績が余りにもすばらしいもので、それを書き残して僧侶たちに学ばせようと思つて一卷を成したのだ、というのである。言い換えれば、『伝曆』の作者が聖徳太子という不世出の人物に深い感銘を受け、それを人にも語り伝えたいではいらなかったために筆を執つた作品が『伝曆』であつた、としているのである。

物語に対するこのような姿勢は、『源氏物語』における「物語論」のなかにも見出すことが出来よう。

その人の上とて、ありのままに言ひ出づることこそなれ、よきもあしきも、世に経る人のありさまの、見るにも飽かず聞くにもあまることを、後の世にも言ひ伝へさせまほしきふしを、心に籠めがたくて言ひおきはじ

めたるなり。

〔蜚〕の巻、二二二頁（14）

そもそも物語というものは、誰それの身の上のことと決めて、ありのままに語るこそぞないにしても、良いことであれ悪いことであれ、世を生きてゆく人の有様で、見ても見飽きず、聞いても聞き流しにできないこと、後の世にも語り伝えたい数々の事柄を、心ひとつに包みきれずに、書き留めておいたのが始まりなのです、というのである。

式部はここで、或る特定の人物の「世に経る人のありさま」、つまりこの世に生きる姿に感動して、「見るにも飽かず聞くにもあまること」、そして「後の世にも言ひ伝へさせまほしきふしぶし」を、自分ひとりの心に納めておくことができないうために書き記したものが物語のそもそもの始まりなのだ、と言っているのである。物語に対する式部のこのような考え方は、『聖徳太子伝暦』の「跋文」において述べられていることと共通しているのではなからうか。

『伝暦』の執筆が聖徳太子という優れた人物の事績に感動したためであったように、「物語論」もまた特筆すべき人物の生き方に感銘を受け、触発されたことに物語の出発点を置いている。そして、『伝暦』がその尊くもすばらしい生涯を人に語らずにはいられない衝動に駆られて書き出されたように、「物語論」もまたその人物の生きてゆくありさまを誰かに語り伝えたいという点に物語執筆に至るそもそもの動機を見出しているのである。「後の世にも言ひ伝へさせまほし」という「物語論」の条りは、『伝暦』にいう「庶こひねがはくは幼童に伝へん」という一節と照応していると言えよう。すなわち、『聖徳太子伝暦』と『源氏物語』の「物語論」は、或る

感銘深い人物の生き方を自分の心ひとつに秘めかねて後の世に語り伝えたものなのだ、という物語執筆の動機において一致していると言えるのである。

また、『伝暦』は次のように記している。

「恐らくは言の経ことばらざるを以て、覧みん者あざけり晒いたを致さんことを。庶こひねが幾なはくは、小説を遺すてず、彼の聖跡を貽たさん。豈に以て輒なく妙徳を潤色するのみならん乎」、つまり、自分のこの雑然としてまとまりのない文章を見て、人々はきつと嘲ることだろう。しかし、私の願いは、取るに足りないと思われする事柄をも捨てることなく記し、太子の偉大な事績を残すことにある。どうして安易に潤色を加えるだけだろうか、と。

これによれば、『伝暦』は何よりも太子の聖なる事績を残すことを重んじ、そのためには文章の乱れをも厭わず、「小説」つまり、取るに足りない事柄や他愛ないエピソードまでも敢えて記した作品であるということになる。つまりここには、貪欲なまでに真実を追求しようとする物語執筆上の姿勢が示されているのである。事実、『伝暦』は、太子に関する荒唐無稽な奇瑞や神秘的な伝説を憚ることなく集めて記すことを大きな特徴としている。そのため、一部の歴史家からは、はなはだ信憑性に欠けるという理由で、太子に関する「尤も不確実なる書」⁽¹⁵⁾の一つに数え上げられているほどなのである。しかしそれらは、『伝暦』の作者に依れば、あくまでも太子の聖なる事績を後世に伝えんがために記したもので、ということになるのである。つまりここには、他愛ない事柄や信じ難い出来事をも敢えてそのまま記すことによつて、かえって太子の真実に感動をもつて肉薄しようとする、伝記物語作家の果敢な手法があるのではなからうか。

これとよく似た表現を、『源氏物語』の「物語論」のなか

にも見出すことができる。

このいつはりどもの中に、げにさもあらむとあはれを見せ、つきづきしくつづけたる、はた、はかなしごとと知りながら、いたづらに心動き、(中略)いとあるまじきことかなと見る見る、おどろおどろしくとりなしけるが目おどろきて、静かにまた聞きたびぞ、憎けれどふとをかきふしあらはなるなどもあるべし。

〔「蛩」の巻、二一頁〕

物語のこうした数々の作り話の中にも、なるほどそんなこともあろうかとしみじみとした人情の機微を見せ、尤もらしく書きつづけてあるのは、一方では他愛もないことと承知しながらも、無闇に心が動くもので、全くありそうもないことだなど思いながら読み進めてゆくうちに、大袈裟に書いてあるので目を見張り、落ち着いてもう一度聞く時には、こんなことがあるものかと腹立たしくなりますが、そうした中にも、思いがけず、ふと感心させられるところが、明らかに語られていることもあるでしょう、というのである。

つまり式部は、奇跡や俄かには信じ難い話も、嘘いつわりだとして捨て去るのではなく、取るに足りない、他愛ない事柄もそのまま記すことによって、人の目を引き、しみじみと感動させられるものがある、それを記すのが物語なのだ、と言っているのである。このことは、「小説を遺すてず、彼の聖跡ひらを貽たさん。豈に以てたず輒たずく妙徳を潤色するのみならん乎」という『伝暦』の精神そのままだと言えよう。すなわち、『聖徳太子伝暦』と『源氏物語』の「物語論」は、物語執筆の内容においても一致しているということができるのである。

そしてまた、さらに『伝暦』は、次のように記すのである。

「聖徳太子、入胎の初め、在世の行、薨こうじたまひて後の事、日本書記、四天王寺の壁に在り。聖徳太子の伝、并せて無名氏の撰し伝へたる補闕記等は、其れ大概を載せて、委曲を尽くさず。而るに今、難波の百濟寺の老僧に遇うに、古老の録し伝へたる太子の行事、奇蹤きそうの書三巻を出せり。四巻の暦録と、年暦を比較するに、一つも誤らず。余が情こころ大に悦て、此の一暦に載す」、つまり、聖徳太子が身籠ったことから、在世中の事績、亡くなつて後のことなどを記した『日本書記』や四天王寺の壁にある『聖徳太子伝』、また作者不詳の『上宮聖徳太子伝補闕記』などは、いずれもあらましを述べただけで、事細かに記されていないことが兼ねがね不満だった。ところが最近、難波にある百濟寺の老僧に会つたところ、古老が伝録した聖徳太子の事績を記す三巻の書を見せられた。これを『暦録』四巻の年譜と比較してみると、全く相違が見あたらない。そこで私は、大変に喜んでその資料を本書に記したのである、というのである。

ここで私が特に注目したいのは、『聖徳太子伝暦』の作者が、『日本書紀』をはじめとするこれまでの諸々の太子伝が、どれもこれも「大概を載せて、委曲を尽く」していないために記したのが本書である、と述べている部分である。これによれば、『聖徳太子伝暦』という書物は、「委曲を尽くす」ために書かれた書であるということになる。言い換えれば、「委曲を尽くす」ということこそが、『伝暦』執筆のねらい、本意だったということになるのである。

この記述を読むと、真つ先に想起せずにはいられないのが、『源氏物語』の「物語論」のなかでも殊に知られた次の一節である。

日本紀などはただかたそぼぞかし。これらにこそ道々みちみちしくくはしきことはあらめ。

〔「蛩」の巻、二二二頁〕

『日本書紀』などはほんの一面にしかすぎないものです。これら物語にこそ、かえって真理を含み、委細を尽くした事柄が書かれてあるでしょう、というのである。

ここで式部がいう『日本書紀』は、私の解釈によれば、『源氏物語』が源泉として踏まえている『日本書紀』の神話を直接には意味し、その神話と『源氏物語』との相違とを述べているのがこの一節であると解釈されるのだが、今それを『日本書紀』と『聖徳太子伝暦』との関係に置き換えて読み直すことも可能なのではあるまいか。

『日本書紀』に記された「太子伝」は、太子という人間を伝えるほんの一面でしかない。そうではなくて、太子に関する事柄をつぶさに記し、それによって太子の真実を活写し、太子に対する親しみと共感とを読者にいだかせるようなもの、それこそが物語というものではないのか。言葉を換えて言えば、虚実にわたって「委曲を尽くす」ものが物語であり、それこそが物語の本領なのだ、というのである。そのように考えるならば、「日本紀などはただかたそぼぞかし。これらにこそ道々しくくはしきことはあらめ」という「物語論」の一節は、やはり『日本書紀』を源泉として成立した『聖徳太子伝暦』を置いてみた時に、実にしっくりと合点できるのではなからうか。すなわち、『聖徳太子伝暦』と『源氏物語』の「物語論」とは、物語の最も本質的な部分である執筆の態度においても見事に一致していると言いうことができるのである。すでに述べたように、『聖徳太子伝暦』という書物は、後

世に最も大きな影響を与えた物語の一つで、人々の太子観はこの書によって形成され、以後の太子信仰はこの書から発したとまで言われている作品である。紫式部は、そうした『聖徳太子伝暦』という書物から「物語」のもつ圧倒的な影響力と限りない可能性とを学んだのではなかったか。『聖徳太子伝暦』という作品が、「物語」の枠を越え、ひとつの信仰を飛躍的に増幅させることによって、聖典の如く崇められていった過程は、式部に、『日本書紀』などの歴史書には到底及ぶことのできない、「物語」の孕む絶対的な力を知らしめた筈である。物語は、真実に一番近づくことが出来る。そして、物語には人の心を揺り動かす絶大な力がある。式部は、そのことを『伝暦』から学ぶことによって、「物語」に対する不動の確信を心中に獲得していったのではなからうか。

『日本紀』などはほんの一面にしかすぎず、物語にこそ委曲を尽くした真実がある――。

物語に対する確固たる信念をもって、式部が、ここまで断言できたのは、単なるひとつの「物語」が、熱狂的に人心を動かし、圧倒的な影響力を後世に及ぼした『聖徳太子伝暦』という見事な実例を目の当たりにしていたからに相違ない。すなわち、紫式部の「物語」に寄せる絶対の確信こそ、『聖徳太子伝暦』が式部にもたらした最大のものだったと言いうことができるのである。

以上、『聖徳太子伝暦』と『源氏物語』の「物語論」とを比較してみた。

これらを要約すると、『聖徳太子伝暦』の「跋文」と『源氏物語』の「物語論」は、或る感銘深い人物の生き方を後世に語り伝えたいという物語執筆の動機において、また俄かに信じ難い話や他愛ない事柄もそのままに記すという物語執筆

筆の内容において、そして「委曲を尽くす」ということを本領とする物語執筆の態度において、見事に一致しているということができよう。

これによれば、『聖徳太子伝暦』が『源氏物語』の成立に及ぼした影響は、物語の枠組みや構成といった外的な面だけに止まらず、物語観といった物語の内奥深くにまで及んでいたことがわかる。その意味で『聖徳太子伝暦』という作品は、『源氏物語』に物語の「いのち」をもたらし、『源氏物語』をこの世に生み出すに至った、『源氏物語』の「母胎」だったということができるのである。

四 異郷の祖

さて、これまで述べてきたように、聖徳太子は、『源氏物語』の成立にとって欠くことのない存在だったのである。それはあたかも、スサノヲノミコトに匹敵する程の重要さだったと言いうことが出来よう。スサノヲが本質的なモデルとして光源氏を支えていたように、聖徳太子もまた光源氏のもう一方の面を支えるかけがえないモデルだったのである。すなわち、スサノヲと聖徳太子は光源氏を間にはさんで、まさに『源氏物語』の二本柱として並び立っていたということが出来るのではなからうか。

それにしても紫式部は、何故、光源氏という人物を造型するにあたって、その根本にスサノヲと聖徳太子という異色な取り合わせの人物を敢えて選び取ったのであろうか。

スサノヲと聖徳太子というと、一見何のつながりもないかのように受け取られそうである。確かに、スサノヲは神話に登場する神であり、他方聖徳太子は歴史に名を残す實在の人

物であって、その相違は甚だしいとしか言いようがない。しかし、この二人の人物の間に『源氏物語』という作品を置いてみると、何らのつながりもないかに思える両者にも、実はいくつかの重要な共通点を見出すことが可能なのである。まず、スサノヲと聖徳太子は、いずれも『日本書紀』に登場しているという点で共通している。

スサノヲは『日本書紀』巻第一「神代上」に登場し、日本神話を代表する英雄神としてその活躍が描かれている。一方、聖徳太子は『日本書紀』巻第二十一「用明天皇」の巻以降に登場し、「推古天皇」の巻を中心に多くの記述がなされている。スサノヲの場合には、『日本書紀』のほかに『古事記』にも登場し、その「上つ巻」に活躍がもの語られているが、聖徳太子の場合には、『古事記』「下つ巻」用明天皇の条に、その皇子の名として「上宮 厩戸豊聡耳命」とあるばかりで、推古天皇の条には一切記されていない。ということは、スサノヲと聖徳太子が登場し、その活躍が記されている共通の書物ということになれば、『古事記』ではなく、やはり『日本書紀』ということになるのである。

『日本書紀』が『源氏物語』にとって最も本質的な源泉であると考える私にとって、光源氏のモデルであるスサノヲと聖徳太子がいずれも『日本書紀』に登場し、その活躍が描かれているということは極めて重要な事柄だと思われる。

次に、スサノヲと聖徳太子は、いずれも天皇の血統、皇統につながっているという点で共通している。

聖徳太子は、第三十一代用明天皇の皇子として生まれ、叔母である推古天皇の皇太子を務めた人物で、天皇の血筋につながる、皇族の代表的な人物だと言える。他方スサノヲは、皇室の祖であるアマテラスオホミカミが実の姉であるところ

から、やはり皇族に連なる立場にあるということができるとはなかるうか。つまり、この両者はいずれも天皇家の血筋に連なっているという点で共通しているのである。このことは、天皇の皇子として生まれた光源氏を中心皇室を舞台に展開される、皇統の物語としての側面をもつ『源氏物語』にとつて、光源氏のモデルであるスサノヲと聖徳太子の二人が同じように天皇家の血筋に連なるということは、重要な共通点だと思われる。

以上、スサノヲと聖徳太子の共通点として、いずれも『日本書紀』にその活動が記載されている点、そしていずれも皇統に連なる人物である点について述べてみた。これらの共通点は、『日本書紀』を源泉とし、天皇の皇子である光源氏を中心に天皇の治世を描いた『源氏物語』にとつて、極めて意義深い事柄だと言えよう。

しかし、これらのほかに、実はさらに重要な共通点がある。スサノヲと聖徳太子との間には認められるのである。

それは、スサノヲと聖徳太子とがいずれもそれぞれの「異郷の祖」であるという点である。つまり両者は、同じようにそれぞれの異郷をもち、それぞれが「異郷の祖」として位置づけられているということなのである。

スサノヲの場合は、神話的世界観による異郷「根の国」の「祖」といふべき存在だと言ふことができよう。

日本神話に依れば、スサノヲは「根の国」に渡ることをひたすら希求し、結果的にそれを果たしたことが知られる。つまりスサノヲは、「根の国」という異郷の主宰神となっているのである。『古事記』には、「根の国」に住むスサノヲが、八十神に迫害されてやって来た大国主に試練を施し、葦原の中つ国を統治するに相応しい資格を獲得させて再生復活させ

る過程が描かれている。つまりスサノヲは、「根の国」という神話的世界を統治する異郷の「祖」として位置づけられているのである。

これに対して、聖徳太子は仏教的世界観による異郷「浄土」の日本における「祖」といふべき存在だと言ふことができる。

聖徳太子は、日本に伝わって間もない仏教に幼いころから親しみ、生涯に亘って厚い信仰をいだきつづけた人物であった。それゆえ、太子の最終的な願いは、涅槃の境地に至り、「浄土」に往生することであつたとみてよからう。そのことは、たとえば、太子の身辺にいた人びとの行為からも窺い知ることができる。

聖徳太子が病の床に就いた時、その妻子たちが太子の病氣平癒を願つて発願し、その死後、太子の冥福を祈つて止利法師に造らせた「法隆寺金堂釈迦三尊像」の光背銘には、次のように記されている。

時王后王子等、及与諸臣、深懷愁毒、共相発願、仰依三宝、当造釈像尺寸王身、蒙此願力、軫病延寿、安住世間、若是定業、以背世者、往登浄土、早昇妙果

時に王后・王子等、及諸臣と、深く愁毒を懷き、共に相発願すらく「仰ぎて三宝に依り、当に釈像の尺寸王身なるを造るべし。此の願力を蒙り、病を軫じて寿を延べ、世間に安住せむことを。若し是れ定業にして、以て世に背かば、往きて浄土に登り、早く妙果に昇らむことを」と(16)。

これによれば、太子の妻子たちは太子と等身大の釈迦像を造り、その願力によって病を転じ、寿命を延ばしてほしいと願っていたことがわかる。そして不幸にしてその願いが叶わず、太子にもしものことがあった場合には、「往きて浄土に登り、早く妙果に昇らむことを」と祈願しているのである。つまり、もしも天寿によってこの世を去ったならば、「浄土」のぼり、仏のすぐれた果報が得られますようにと祈っているのである。これを見るならば、少なくとも近親者の間では、太子は死後「浄土」におもむくはずだと信じられていたことが知られよう。

有名な「天寿国繡帳」は、そうした太子の姿を具体的に図像化したものである。

太子の没後、太子の妃の一人であった橘大郎女がその死を嘆いて、太子が「浄土」にいます姿を図像に描いて偲びたいと思ひ立ち、祖母にあたる推古天皇に願ひ出たという。その経緯を記した「天寿国繡帳」の銘文が『上宮聖徳法王帝説』のなかに残されている。

于時多至	波奈大女	郎悲哀嘆	息白畏天	皇前曰啓
之雖恐懷	心難止使	我大王与	母王如期	從遊痛酷
无比我大	王所告世	間虚仮唯	仏是真玩	味其法謂
我大王心	生於天寿	国之中而	彼国之形	眼所巨看
怵因図像	欲觀大王	往生之状	天皇聞之	悽然告曰
有一我子	所啓誠以	為然勅諸	采女等造	繡帳二張

時に多至波奈大女郎、悲哀嘆息、天皇の前に畏み白して曰わく、「之を啓すは恐れありと雖も、懷う心止使め難し。我が大王と母王と、期するが如く從遊す。痛酷比

無し。我大王告る所、世間は虚仮、唯仏のみ是れ真なりと。其の法を玩味するに、謂えらく、我が大王は応に天寿国の中に生まれてあるべし。而れども彼の国の形は、眼に看巨き所なり。怵わくは、図像に因りて、大王の往生の状を觀む」と。天皇之を聞き、悽然として告りて曰わく、「一りの我が子有り。啓す所誠に以て然りと為す」と。諸の采女等に勅して、繡帳二張を造らしむ(17)。

ここで橘大郎女は、亡くなった太子はきつと「天寿国」に生まれ変わっているに違いない。しかし、その国は肉眼で見ることのできない場所なので、図像によって太子が往生した様子を偲びたい、と言ったという。推古天皇はこれを聞いて心打たれ、名立たる絵師たちを集めて下絵を描かせ、采女たちに二張りの刺繡を作らせた。それが、今日中宮寺にその残欠を伝える「天寿国繡帳」なのだ、というのである。

これによれば、死後の太子は間違いなく「天寿国」という理想の「浄土」に渡り、そこで安らかに暮らしているに違いない、と信じられていたことがわかる。つまりこの事實は、当時すでに太子は極楽往生を願ひ、その願ひ通りに見事「浄土」への往生を果たしたとする考え方が定着しつつあったということを意味している。

聖徳太子の死後、太子への追慕と讃仰が太子信仰という形で展開し、太子は日本における仏教の創始者、日本仏教の開祖として崇められることになっていった(18)。

平安時代のはじめに天台宗を開いた伝教大師最澄は、聖徳太子を熱烈に崇拜したことで知られている。最澄の弟子である光定が記した『伝述一心戒文』に依ると、最澄は、聖徳太子を南岳慧思禪師の後身、つまり生まれ変わりであるとし、

みずからを太子の玄孫、すなわち孫の孫だと名乗って、天台
教学の正当な後継者であると主張したという。この最澄の熱
烈な太子信仰は、弟子の慈覚大師円仁をはじめとする天台宗
の僧侶たちに広く受け継がれてゆくこととなった。真言宗を
開いた弘法大師空海も太子を崇敬し、太子廟に百ヶ日参籠し
たとされ、後には空海が太子の生まれ変わりでだとする話まで
伝えられた。最澄や空海のみにとどまらず、この後にも浄土
真宗の親鸞、法華宗の日蓮、時宗の一遍など仏教諸派が、み
ずからの依って立つべき淵源をいずれも太子に求めていった。
太子は宗派を超えて広く崇敬され、文字通り日本仏教の開祖
として讃仰されるに至ったのである。そこには、聖徳太子が
熱心な仏教の信者であり、『法華経』をはじめとする仏典を
日本にもたらし、その注釈をなしたといった偉業に加えて、
太子が日本における「極楽往生」の始祖として信じられてい
たことが大きくかわっていたのではないかと考えられる。
そのことを如実にもの語るのが『日本往生極楽記』の記述で
ある。

寛和元年（九八五）ごろ成立したといわれる慶滋保胤の
『日本往生極楽記』には、日本において「極楽往生」を果た
した僧俗四十二人の伝記が収められているが、その第一に掲
げられているのが聖徳太子なのである。つまり太子は、深く
仏教に帰依し、みごと「浄土」に往生した実例、日本におけ
る「極楽往生」のさきがけとして位置づけられていたことが
わかるのである。

『日本往生極楽記』に載録された聖徳太子の記述は、次の
ような後日譚によって結ばれている。

高麗の僧惠慈、太子の薨にたまへることを聞きて、哀哭

して誓を發し願ひて曰く、日本の太子は誠にこれ大聖な
り。我境を異にせりといへども、心は断金にあり。縦ひ
独り愁に生きたりとも何の益かあらむ。我太子の薨に
たまはむ日をもて必ず死して、太子に浄土にて遇はむと
いへり。明くる年の二月廿二日は太子薨にたまひし日な
り。惠慈即ち死せり。果してその言のごとし（19）。

かつて太子の師として来朝し、太子と肝胆相照らす仲であつ
た高麗の僧惠慈は、太子の喪を伝え聞いて慟哭した。そして、
自分がこれから独り生きたとしても何の意味があるう、翌年
の太子の命日を期して後を追おうと誓願し、「太子に浄土に
て遇はむ」という一念で、その言のごとく遷化した、とい
うのだ。すなわち惠慈は、断金の友に再会するために太子の
います「浄土」に渡ることをひたすら冀い、遂にその宿望を果
たしたというのである。

この話は、『日本往生極楽記』のみならず、正史である
『日本書紀』をはじめ、聖徳太子の伝記である『上宮聖徳法
王帝説』『上宮聖徳太子伝補闕記』『聖徳太子伝暦』のいずれ
にも掲載されているところから察するに、聖徳太子と「浄土」
との分かち難い結びつきをもの語る象徴的な逸話として受け
取られていたのかも知れない。そう考えるならば、聖徳太子
が日本における「浄土」の始祖であることは人びとから広く
認知されていたと言いうことができるのではなからうか。

このようにみえてくると、スサノヲと聖徳太子とがいずれも
それぞれの「異郷」をもち、それぞれが「異郷の祖」である
ことで共通していたことがわかる筈である。紫式部はスサノ
ヲと聖徳太子という二人の人物を踏まえることによつて、
『源氏物語』のなかに「根の国」と「浄土」という相反する

異郷を指し示そうとしたのであった。

スサノヲがめざした神道世界における異郷「根の国」と聖徳太子がおもむいたとされる仏教世界の異郷「浄土」。式部は日本人の前途に広がるこの二つの異郷を描き出すことによつて、「日本人の魂のゆくえ」という日本人がいだきつつける大きな疑問符を提示してみせたのではなかったか。その意味で『源氏物語』は、現世だけでなく、「根の国」と「浄土」という二つの別世界を抱えこんだ気宇壮大な物語だった、と言ふことができるのである。

注

- (1) 杉浦一雄「源氏物語と現世的価値」(『千葉商大紀要』第四十四卷第三号、平成18年12月)
- (2) 坂本太郎『聖徳太子』(人物叢書、昭和54年。「坂本太郎著作集」第九卷『聖徳太子と菅原道真』、吉川弘文館、平成元年、一三四頁)
- (3) 田中重久「『源氏物語』構想と準拠の研究——曾祖父兼輔撰『聖徳太子伝暦』との関係——」(『京都府立洛北高等学校学友会誌』第六号、昭和31年1月)
- (4) 日中文化交流史研究会編『『聖徳太子伝暦』影印と研究』「解説」(昭和60年、桜楓社、三七三頁)
- (5) 注(4)に同じ。三七六頁。
- (6) 注(3)に同じ。
- (7) 杉浦一雄「源氏物語の源泉」(『千葉商大紀要』第三十七卷第四号、平成12年3月)
- (8) 杉浦一雄「源氏物語と根の国」(『千葉商大紀要』第三十八卷第一号、平成12年6月)
- (8) 注(4)に同じ。三九二頁。
- (9) 坂本太郎「日本書紀と聖徳太子の伝記」(『古典と歴史』、昭和47年。「坂本太郎著作集」第二卷『古事記と日本書紀』、吉川弘文館、昭和63年、三七六頁)
- (10) 藤原猶雪「聖徳太子伝暦復原の研究」(『復原聖徳太子伝暦』、昭和二年)
- (11) 『和歌大辞典』(明治書院、昭和61年)、『国史大辞典』第十二卷(吉川弘文館、平成3年)、『平安時代史事典』(角川書店、平成6年)
- (12) 注(4)の「解説」はその経緯について詳しい。
- (13) 注(4)に同じ。三六二—三六七頁。ただし、カタカナ等はひらがなに改めた。
- (14) 『源氏物語』の本文は、『新編日本古典文学全集』(小学館)に拠る。
- (15) 久米邦武『上宮太子実録』(明治38年)、後に『聖徳太子実録』(大正8年)と改題。(『久米邦武歴史著作集』第一卷「聖徳太子の研究」、昭和63年、吉川弘文館、三頁)
- (16) 東野治之「聖徳太子関係銘文史料」(『聖徳太子事典』、柏書房、平成9年、四八七—四八八頁)
- (17) 注(16)に同じ。四八九—四九〇頁。
- (18) 田村圓澄「聖徳太子」(中央公論社、昭和39年)、田中嗣人「聖徳太子信仰の成立」(吉川弘文館、昭和58年)他。
- (19) 『日本往生極楽記』(『日本思想体系』7『往生伝 法華験記』、岩波書店、昭和49年、一六頁)

〔抄録〕

本稿は、『源氏物語』が成立するにあたって『聖徳太子伝暦』から学び取った事柄を、構想の面ならびに物語観の面から明らかにすることを目的としている。

『源氏物語』と『聖徳太子伝暦』とを全体的に比較してみると、いずれも傑出した人物の詳細な一代記であること、記述の方法が年次を追った編年体であること、主人公の死後も子孫のことにまで記述が及んでいくこと、記述の対象となっている年数が一致していること、多くの文献を踏まえながらも『日本書紀』を原典としていることなど、構想の面でさまざまな共通点を見出すことができる。さらに、『源氏物語』の「物語論」と『聖徳太子伝暦』の「跋文」とを比較してみると、或る感銘深い人物の生き方を後世に語り伝えたいという物語執筆の動機において、また俄かには信じ難い話や他愛ない事柄もそのままに記すという物語執筆の内容において、そして「委曲を尽くす」ということを本領とする物語執筆の態度において両者は一致していることがわかる。

すなわち、このことから、『聖徳太子伝暦』は『源氏物語』が成立するにあたって決定的な影響力をもたらした、かけがえのない作品だったと結論することができるのである。